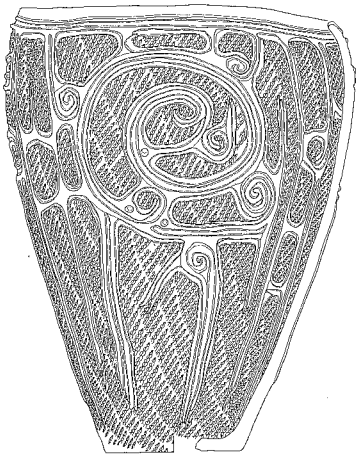
繋V遺跡

TSUNAGI V SITE

—繋小学校校舎等増改築工事事業に伴う緊急発掘調査概要報告書—



2010. 3

盛岡市教育委員会

例　　言

1．本書は、平成19年９月18日から11月30日（第34次）、平成20年９月25日から平成21年12月24日（第36次）にかけて実施した岩手県盛岡市繋字舘市114番地１他に所在する繋Ｖ遺跡の緊急発掘調査（盛岡市立繋小学校校舎等増改築事業）の概要報告書である。

2．本書の執筆編集は、盛岡市遺跡の学び館　千田和文・津嶋知弘・菊池幸裕・神原雄一郎・佐々木亮二・鈴木賢治・佐々木紀子が協議し、神原雄一郎・佐々木紀子が担当した。

3．遺跡の平面位置と高さは、繋Ｖ遺跡の平面は公共座標第Ｘ系を変換して表示し、高さは標高値で示した。

4．土層図は堆積の仕方を重視し、線の太さで使い分けた。土層注記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位について割愛した。なお、層相の観察にあたっては、『新版標準土色帖』（1965　小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。

5．発掘調査の出土遺物・諸記録は盛岡市遺跡の学び館で保管している。

6．本概報における遺構記号は、下記のとおりである。

　ＲＡ－竪穴住居跡、ＲＥ－竪穴、ＲＤ－土坑、ＲＦ－焼土

7．本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の５万分の１「盛岡」「雫石」「鶯宿」「日詰」「外山」「薮川」である。

8．発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市教育委員会 遺跡の学び館で保管してある。

目　　次

例言
目次

Ⅰ．遺跡の概要
　１．遺跡の環境……1
　２．過去の調査……2
Ⅱ．調査内容
　１．調査経過……4
　２．遺跡の基本層位と遺構検出状況……4
　３．縄文時代の主な遺構について……6
Ⅲ．まとめ……12
報告書抄録……13

Ⅰ．遺跡の概要

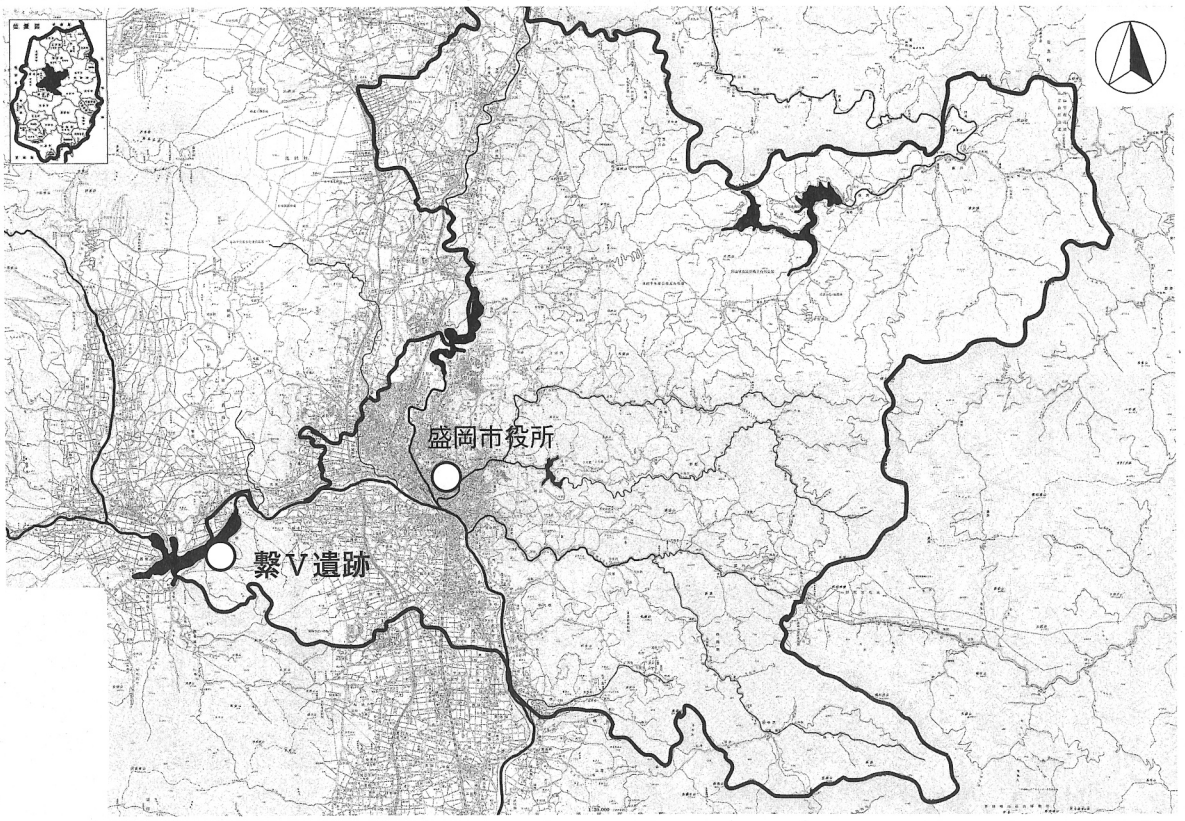
１．遺跡の環境

遺跡の位置　繋Ⅴ遺跡は盛岡市街地から西に約10kmの盛岡市繋字舘市地内に所在する。

地形・地質　繋地区は、奥羽山脈から東流する雫石川により形成された雫石盆地東端、箱ヶ森（865m）、南昌山（848m）が連なる篠木・東根山山地の北麓に位置する。

周辺の地形は雫石川の北岸と南岸で大きく相違し、北岸では火砕流堆積物（小岩井泥流）を基盤とした台地が発達し、南岸では前述した東根山山地が迫り、北岸で見られるような広い平坦面は発達していない。

篠木・東根山山地は主に新第三紀中新世の飯岡層・男助層・舛沢層より構成され、飯岡層は輝石安山岩・緑色凝灰角礫岩、男助・舛沢層は古雫石湖に堆積した緑色凝灰角礫岩や砂岩・泥岩等が含まれる。これらの岩石は雫石川河床に転石として見られ、繋Ⅴ遺跡を含め雫石川流域の縄文時代遺跡では石器の石材として利用されている。なお、硬質泥岩、珪質泥岩と呼ばれる貝殻状に剥離する硬質の岩石は、考古学上における石器石材の名称で「頁岩」と一括して称される場合が多い。今回の発掘調査においても厳密に石材分類が困難であったため「頁岩」の名称を用いて分類作業を行っている。



第１図　繋Ⅴ遺跡の位置　　１：200,000

2．過去の調査

繋遺跡は古くから土器や石器の出土があったが、一般にひろく知られるようになったのは、昭和26年（1951）８月、繋小中学校（当時　岩手郡御所村大字繋字舘市、御所中学校繋分校）校舎増築に伴う敷地造成工事の際に、縄文時代中期の底部穿孔土器が７個体出土したことによる。出土状況は倒立の状態で発見され、全て並列していたといわれる。発見された７個体の土器の内３個体には装飾性に富む文様が器面全体に施され、その文様の美しさから東北地方を代表する縄文土器の一つに数えられ、全国的に紹介される機会の多い土器であった。これらの土器は昭和63年に国重要文化財に指定されている。

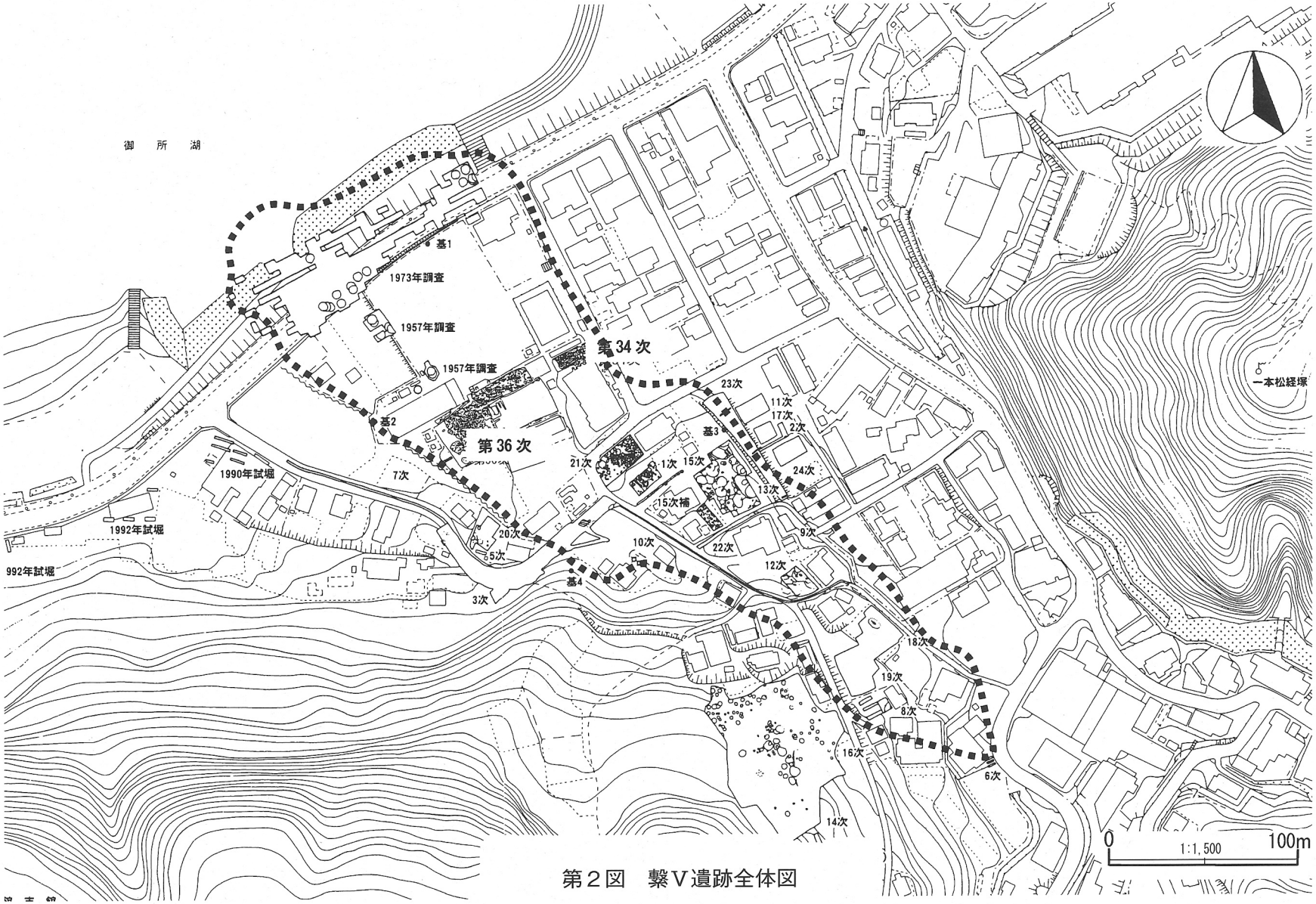
昭和32年の調査　昭和32年（1957）10月、校庭拡張に際して初の発掘調査が実施された。発掘調査は盛岡市教育委員会と岩手大学によって行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡7棟と縄文時代中期から後期にかけての遺物が多量に出土した（昭和35年 草間俊一、吉田義昭「岩手県盛岡市繋遺跡」盛岡市公民館）。

昭和39年の調査　昭和39年（1964）4月、岩手大学の学術調査として実施された。詳細は不明であるが、縄文時代の竪穴住居跡が数棟検出されたようである。

御所ダム建設　昭和48年（1973）から昭和55年（1980）に至る８年間に御所ダム建設に伴う事前の緊急発掘調査が実施されたが、これに先立つ分布調査によって、盛岡市から雫石町にまたがる700ha用地内に37遺跡が確認された。繋地区においても新たに７遺跡（繋Ⅰ～Ⅶ遺跡、南ノ又遺跡）の所在が確認され、これまでの「繋遺跡」は「繋Ⅴ遺跡」と変更されることとなった。

御所ダム建設に伴う繋Ⅴ遺跡の発掘調査は昭和48年８月に行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡11棟、土坑58基が検出された。出土遺物は縄文時代中期から晩期にかけての土器・石器が多量に出土しており、特に中期初頭から中葉にかけての土器が多数であったようである。

第１～36次調査　昭和58年（1983）より個人住宅など各種開発に伴う事前の緊急発掘調査が盛岡市教育委員会で行われ、繋遺跡群（繋Ⅰ～Ⅶ遺跡）全体で平成21年度までに36次に及ぶ緊急発掘調査が実施されている。発掘調査は主に遺跡南東部の住宅地で行われ、縄文時代中期から後期の竪穴住居跡、土坑が確認されている。特に平成４～６年度の第13･15次発掘調査、平成８年度の第21次発掘調査では繋Ⅴ遺跡の集落を知る上で重要な成果が得られた。第13･15次発掘調査では縄文時代中期中葉～末葉、後期初頭の竪穴住居跡が重複した状態で72棟検出されたことから長期間集落が継続していたことが明らかになり、約46,000㎡ の台地全体が縄文時代中期の大規模集落であることが確認された。遺跡の北東段丘縁辺に調査区がある第21次発掘調査では、第13･15次調査区と近接していながらも様相が異なり縄文時代中期の土坑が134基確認された。土坑の多くは楕円形を呈し、内部よりヒスイ製玉類など特殊な遺物が出土したことから土坑墓であることが考えられる。また、第34次調査区においても第21次調査と同様に土坑墓と考えられる土坑が88基検出されたことから、第13･15次調査区より北西に位置する第21次調査区付近から第34次調査区付近にかけての北東段丘縁辺に墓域が拡がることが明らかにされた。竪穴住居は昭和48年度調査区北東部、第12･13･15･36次調査区の竪穴住居跡検出状況を見る限り、墓域を中心とした扇状の住居域が展開していることが確認されつつある。


御所湖
基1
1973年調査
1957年調査
1957年調査
第34次
第36次
基2
7次
1990年試堀
1992年試堀
992年試堀
20次
5次
3次
基4
10次
21次
1次
15次
15次補
基3
23次
11次
17次
2次
13次
24次
9次
22次
12次
18次
19次
8次
16次
6次
14次
一本松経塚
0
1:1,500
100m

第２図　繋Ｖ遺跡全体図

Ⅱ．調査内容

１．調査経過

試掘調査　平成14年９月、盛岡市教育委員会において繋小学校増改築工事に関する事前協議があり、平成14年11月11～13日に繋小学校校舎周辺を試掘調査した結果、敷地内より縄文時代の遺構・遺物が多数検出され工事着手前の緊急発掘調査が必要になった。

本調査　本調査は工事の進捗状況に応じ、工事予定面積10,629㎡の内3,912.9㎡を下記の日程で調査した。平成16年９月７日～10月20日（第29次　調査面積16.9㎡）、平成19年9月18日～11月30日（第34次　調査面積2,144㎡）、平成20年10月１日～平成21年12月24日（第36次　調査面積1,752㎡）。各調査次数における検出遺構は下記のとおりである。

第29次調査－縄文時代　竪穴住居跡２棟・竪穴１基・土坑４基・ピット14口
第34次調査－縄文時代　竪穴住居跡１棟・土坑88基・ピット300口
第36次調査－縄文時代　竪穴住居跡68棟・土坑65基・配石１基、
　　平安時代　竪穴住居跡１棟

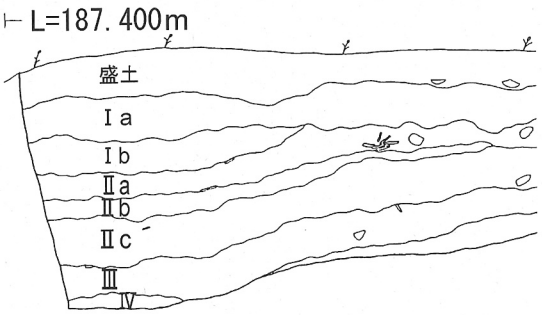
出土遺物の時代・時期は、各次数でほぼ共通しており、縄文時代中期初頭から中期末葉にかけての土器・石器が多数で、前期初頭・後期初頭の遺物が少量出土している。遺物総数は収納コンテナ（54cm×35cm×15cm）467箱分である。

２．遺跡の基本層位と遺構検出状況

繋Ⅴ遺跡第34･36次調査区は、北西に向かって緩やかに傾斜する段丘斜面部に位置する。第36次調査区西壁付近以外は旧校舎の基礎等による撹乱が著しく、第Ⅱ層については第36次調査区西辺で部分的に確認されたのみである。縄文時代中期初頭の遺構掘込面はⅡ層中と思われるが、前述した要因から掘込面が明確なのはＲＡ274･281竪穴住居跡のみである。

調査で確認された層序（第３図）

上位より盛土層、Ⅰ層（黒褐色土を主体に、色調によりａ・ｂ層に細分される）、Ⅱ層（黒褐色土と暗褐色土による混合土。炭化物片を含み縄文時代中期初頭の土器を多量に含む。ａ・ｂ・ｃ層の３層に細分される）、Ⅲ層（スコリア粒を含む黒褐色土層）、Ⅳ層（粘質のシルト質明黄褐色土を主体に安山岩・凝灰岩角礫を含む）の順で確認された。



第３図　第36次調査区南西隅土層図　1：60

第４図　繋Ｖ遺跡第29・34・36次発掘調査全体図　1：600

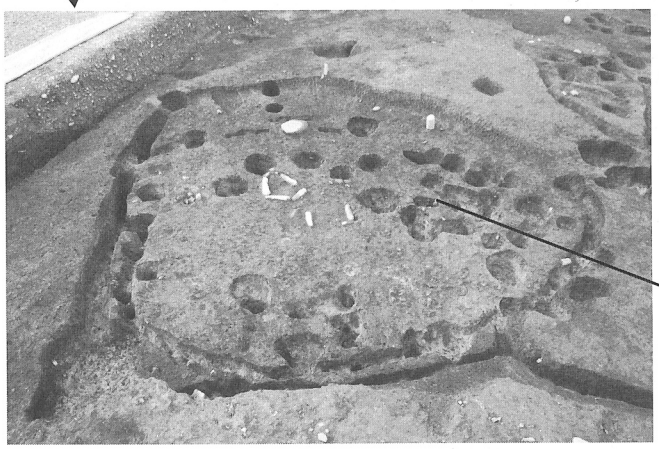
３．縄文時代の主な遺構について

１　竪穴住居跡の概要

縄文時代の竪穴住居跡が71棟検出されている。70棟が縄文時代中期初頭から末葉にかけての竪穴住居跡で、１棟のみ後期初頭の竪穴住居跡であった。本概報では現在も整理作業中であることから主な竪穴住居跡のみ図示し、詳細については本報告に掲載することとしたい。

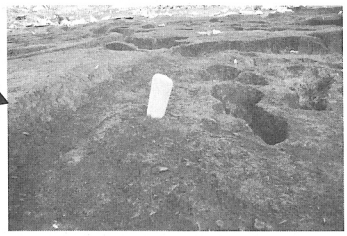
ＲＡ281･274竪穴住居跡　ＲＡ281･274竪穴住居跡は繋Ｖ遺跡では古い時期につくられた竪穴住居に数えられる。ＲＡ281竪穴住居跡は中期初頭の大木７ａ式土器を伴うもので、平面形は隅丸長方形を呈し、地床炉をもつ。ＲＡ274竪穴住居跡は大木７ｂ式土器を伴うもので、平面形は隅丸長方形を呈し、中央部に方形の石囲炉が設けられる。ＲＡ274竪穴住居跡は建替えがあり（Ⅰ・Ⅱ期）、古い時期（Ⅰ期）の壁際には石棒が直立した状態で埋設されており、屋内において祭祀的な空間が設けられていた可能性がある。

ＲＡ281竪穴住居跡全景（大木7ａ式段階）



ＲＡ274竪穴住居跡Ⅰ・Ⅱ期全景（大木７ｂ式段階）

石棒はＲＡ274竪穴住居跡Ⅰ期の北壁に埋設されており、石棒の全長は45cmである。そのうち約14cmが床面下であった。



石棒出土状況（Ⅰ期）

ＲＡ259竪穴住居跡　ＲＡ259竪穴住居跡は中期中葉の大木８ａ式土器を伴うもので、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸5.9m・短軸3.7mをはかる。炉は長方形の石囲炉で、住居の平面形に合わせたかのように住居の中央部につくられる。石囲炉の長軸延長上には伏甕が２基縦列して埋設されていた。

ＲＡ259竪穴住居跡全景（北西より）

伏甕１・２出土状況（南東より）

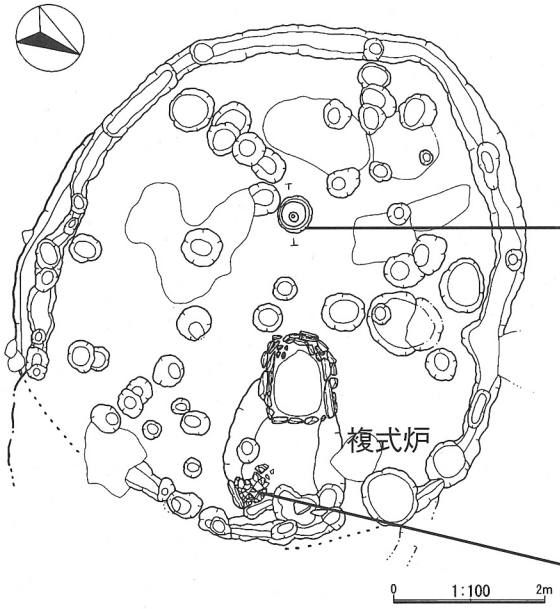
伏甕１

伏甕２

ＲＡ259竪穴住居跡からは伏甕が２基検出されている。市内から発見された住居内に伏甕を埋設する例の多くは、中期後葉の大木８ｂ式段階のものであったが、今回発見された土器は大木８ｂ式より古い中期中葉の大木８ａ式土器であった。さらに、大木８ａ式でも古い時期の土器である可能性があり、初期の伏甕埋設を知る上で重要な例である。

ＲＡ236竪穴住居跡　ＲＡ236竪穴住居跡は中期後葉の大木９式土器を伴うもので、平面形は円形に近い多角形を呈し、規模は長軸6.8m・短軸6.7mをはかる。炉は長半円状の石囲部に浅い掘り込み（前庭部）が伴う複式炉で、前庭部には30cm×40cmの範囲に土器片を敷き詰めた箇所がある。炉の延長上には１基の伏甕が埋設されており、伏甕内部はほぼ空洞であった。

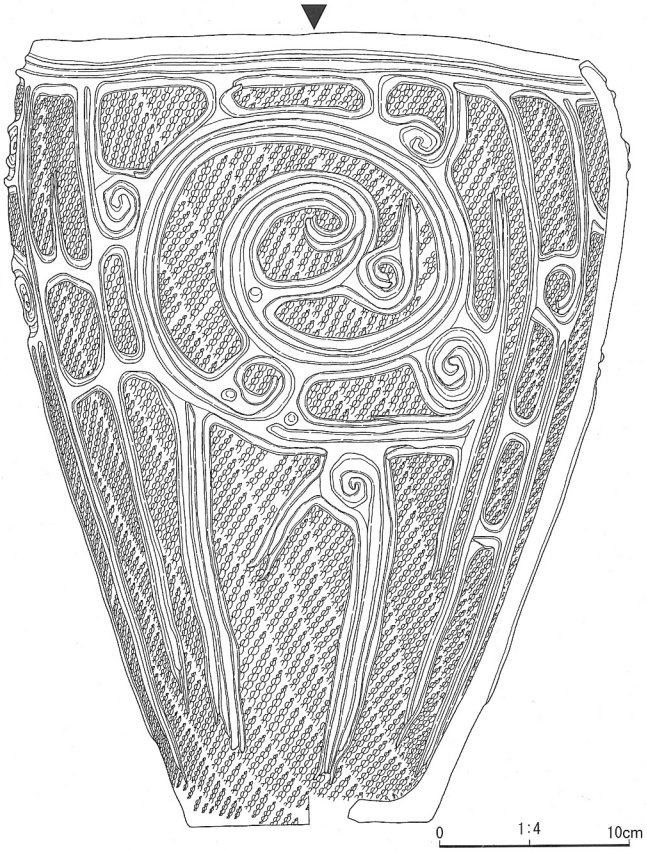
RA236竪穴住居跡全景（東から）



伏甕出土状況

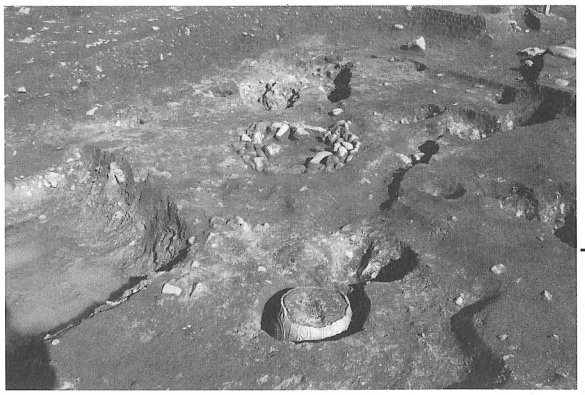
複式炉底面土器出土状況

ＲＡ236竪穴住居跡から発見された伏甕（９頁参照）は高さ41.4cm、最大幅32.3cmの深鉢形土器を伏甕に転用したものである。土器の器面には３単位の大渦巻文を中心に小渦巻文・楕円文を連結して施す。中心的な文様である大渦巻文の巻きの方向・加飾する文様が異なるなど高い装飾性を持った土器である。

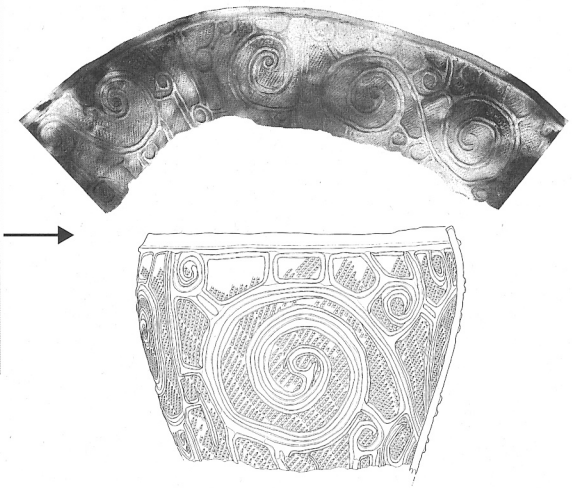


ＲＡ236竪穴住居跡出土伏甕

伏　甕　　第36次発掘調査において中期中葉～後葉の竪穴住居跡床面下からは伏甕が16個体発見されるなど注目すべきものがあった。本項では代表的な伏甕に転用された深鉢を掲載し、詳細については本報告書において記載する。

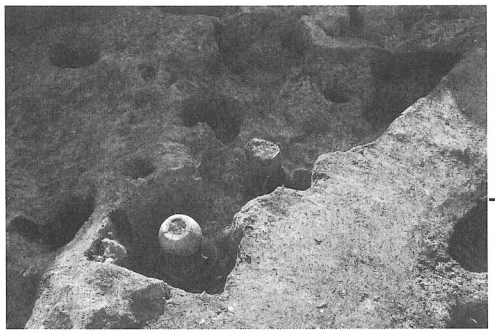


ＲＡ253竪穴住居跡 伏甕出土状況

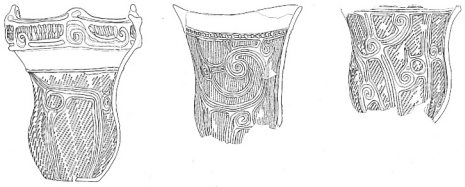


ＲＡ253竪穴住居跡出土伏甕　1:10

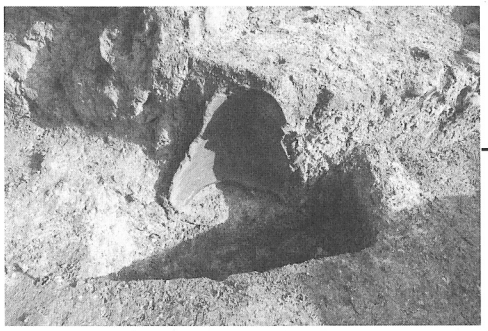
伏甕に転用される深鉢の大きさは、平均的には40cm前後の深鉢が多い。また、ＲＡ253竪穴住居跡出土の伏甕のように底部を壊して埋設するものや、底部に孔を穿つものもある。



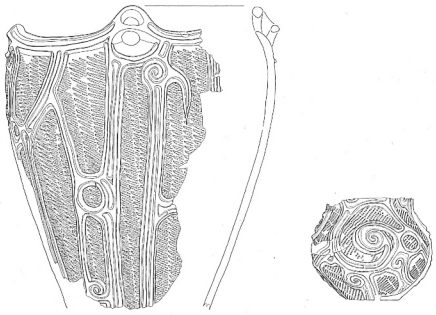
ＲＡ224竪穴住居跡 伏甕出土状況



ＲＡ224竪穴住居跡出土伏甕　1:10

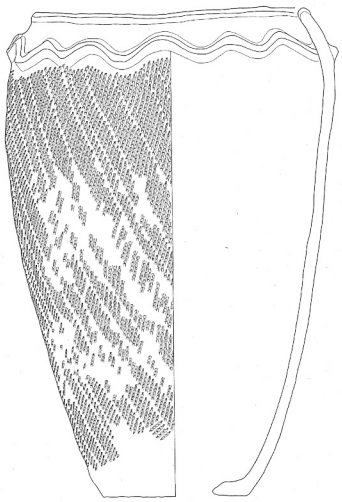


ＲＡ223竪穴住居跡 伏甕出土状況



ＲＡ223竪穴住居跡出土伏甕　1:10

ＲＡ244竪穴住居跡 伏甕出土状況

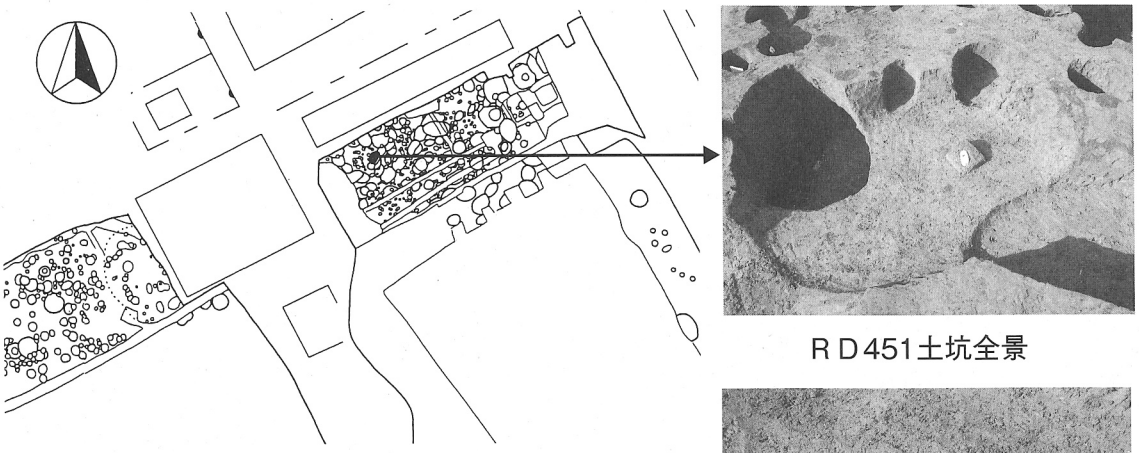


ＲＡ244竪穴住居跡出土伏甕　1:10

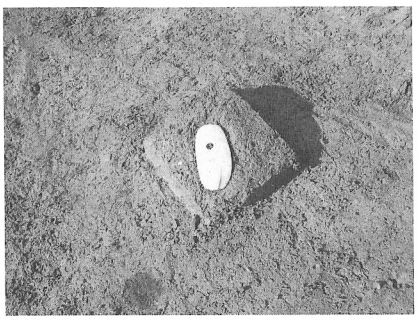
2　土坑の概要

縄文時代の土坑が第34･36次発掘調査分で157基検出されている。土坑の平面形は円形・楕円形・細長い溝状を呈するものであった。楕円形を呈する土坑は第34次調査区に集中し、出土した土器から中期中葉の大木８ａ式頃から中期後葉の大木９式頃の土坑群と考えられる。土坑内や周辺からはヒスイ・蛇紋岩製の玉類が出土していることから、第34次調査区を含めた周辺地区は縄文時代中期の墓域である可能性が考えられる。

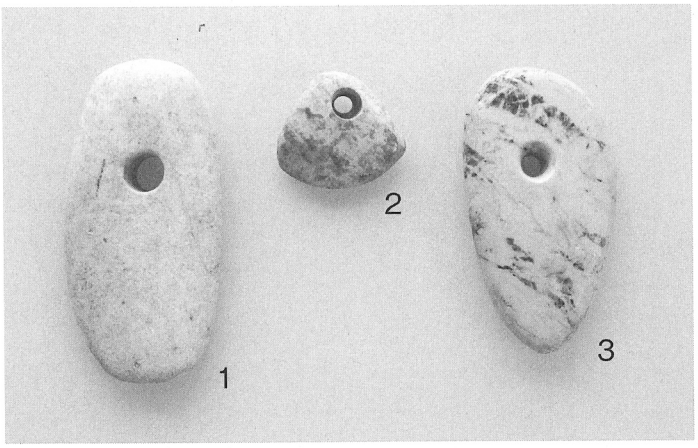
ＲＤ451土坑　ＲＤ451土坑は第34次調査区北西部から検出され、規模は長軸1.37m、短軸0.94mをはかる楕円形で、確認された深さは0.21mである。土坑埋土上部よりヒスイ製の大珠が出土した。



ＲＤ451土坑全景



ヒスイ大珠出土状況



第34次発掘調査区出土石製品

1　ＲＤ451土坑出土
　ヒスイ製大珠
2　撹乱層出土
　ヒスイ製小珠
3　撹乱層出土
　蛇紋岩製垂玉

Ⅲ．調査のまとめ

1　繋Ｖ遺跡第34・36次発掘調査の結果、縄文時代中期中葉から後葉にかけて第34次調査区を含む北東段丘縁辺に墓域が拡がり、墓域を除く台地縁辺に竪穴住居が構築されている集落であることが確認された。

2　伏甕とした住居内に逆位埋設する底部穿孔深鉢は、縄文時代中期中葉から後葉にかけての限られた期間に流行した遺構であることが確認された。

報告書抄録

ふりがな	つなぎごいせき
書名	繋Ⅴ遺跡
副書名	繋小学校増改築工事事業に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	神原　雄一郎、佐々木　紀子
編集機関	盛岡市遺跡の学び館
所在地	〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1　電話 019-635-6600　Fax 019-635-6605
発行年月日	2010年3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
繋(つなぎ)Ⅴ遺跡(いせき) 第34・36次	岩手県盛岡市(いわてけんもりおかし) 繋(つなぎ)字舘市(たていち)114 番地1	0321		39° 40′ 16″	141° 01′ 19″	第34次 20070918～ 20071130 第36次 20081001～ 20091224	3,896㎡	学校増改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
繋Ⅴ遺跡	集落遺跡	縄文時代中期	竪穴住居跡　69棟 土坑　153基	縄文時代中期の土器・石器他	伏甕16個体出土

繋 V 遺 跡

―繋小学校校舎等増改築工事事業に伴う緊急発掘調査概要報告書―

2010年３月26日　発行

発　行　　盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866　盛岡市本宮字荒屋13番地1
電話 019－635－6600　　Fax 019－635－6605

印　刷　　株式会社 杜陵印刷
〒020-0122　岩手県盛岡市みたけ2丁目22－50
電話 019－641－8000　　Fax 019－641－8085